

【パーソナルステートメント】

お名前： 安藤 靖

◆ 項目ごとに指定された文字数程度でお書きください。

- ① 公益社団法人日本青年会議所2020年度ブロック会長としての役割と抱負をお書きください。
(500文字)

1951年に青年会議所は誕生し「ひとづくり」「まちづくり」「教育」「国際社会」など様々な分野において、その時々の課題に取り組み、明るい豊かな社会の創造に向け行動を起こしてきました。私たち青年会議所会員は、自身の成長と地域の発展のため、仲間とともに力を合わせ同じ目標に向かって歩みを進めなくてはなりません。自分の選んだ道を信じ、仲間を信じ支え合いながら、率先して行動を起こすことが、地域を明るく豊かにする第一歩であり、青年会議所で活動することの素晴らしさであります。

40歳までという限られた時間の中で、人と人のつながり、地域と地域のつながりを学び、青年会議所という学び舎において、自己の成長と住み暮らす地域の発展のため、どんな困難をも乗り越えていくことのできる次代を担う若き先導者たちとともに、明るい豊かな社会を創造します。県内会員会議所の連絡調整機関として地域に根差した活動を続ける私たちは、これからも地域を牽引するリーダーが集う団体として、全国で運動をともにする同志との想いを共有し、日本青年会議所や地区協議会の方向性を理解し、県内9LOMの想いを集結したブロック協議会だからこそ構築できる、事業、活動、運動を展開し、地域の未来を創造してまいります。

- ② 自分の人生において、一番大切な価値観は何でしょうか。(500文字)

私が人生において、一番大切な価値観は「幸せ」です。個人、地域、国家の営みはすべて幸せを得るために行われていると言っても過言ではありません。私は、地方に住み暮らし、青年会議所運動を通じて同志と知合うなかで、経済的な利得を求めない行動が多くの人に喜ばれ、そこはかとない満足感を感じるがありました。また、人は人との関わりの中でこそ幸せになれることを感じました。私は、様々な経験を経て、自分に命を繋いでくれた祖先、私を生んだ両親、地域の仲間がいたからこそ自分があること、自分は一人で生きているのだけではなく、周囲によって生かされていること、人は一人では生きて行けず、互いに助け合って生きていることを学びました。そして、本当の幸せは自分の周囲にいる人たちが幸せでなければ得られず、他者を幸せにすることこそ、自らの幸せにつながることを強く感じ、世界の人びとにとって、誰もが納得する幸せを追求することが、自分の幸せに直結するとの信念を持ち、そのために生きることを決意しました。

- ③ これまでの人生の中で、尊敬する偉人、または先輩のどのような姿に惹かれたのか、またそのような人格を育むにはどのような生活環境や教育が必要かをお書きください。(1000文字)

私の尊敬する人は、野球選手のイチローです。イチローは成果を出すために必要なことを明確にし、愚直にそれに打ち込むことができる人です。やみくもに練習するのではなく、その日その日で課題を設定し、それを解決するために練習に取り組みます。自分が必要だと認識したことに対して時間を投資するため、そこには無駄がありません。その結果、日米通算4300本以上のヒットを打つなど、輝かしい功績を残しています。私もイチローのように、今必要なことは何か見極め、そこに集中して成果を出せるような人間になりたいと考えます。知識だけで人を育てることはできません。精神を育てることが重要なのです。精神を育てる過程で知識を与えるのです。精神と知識のバランスがとれた人を育てることが、社会の発展にとって極めて重要なのです。

- ④ これまでお読みになった書籍の中で、感銘を受けたもの、もしくは他の方にもぜひ薦めたいと思っている書籍について、書籍の概要と感銘を受けた点、もしくは薦めたい理由をお書きください。（500文字）

私が読んだ本で感銘を受けた本は慎武宏著「祖国と母国とフットボール」という本です。この本は在日コリアンとして、日本でサッカー選手として活躍した選手の自国への想いや葛藤について書かれている本です。そのなかで一人「安英学」（以下安氏）という選手について記載されている箇所特に感銘を受けました。

幼いころからプロサッカー選手になるという夢を持ち続け、2002年にJリーグ、アルビレックス新潟でプロデビューを果たしその夢をかなえました。

本には北朝鮮の拉致問題で日朝関係が悪化し、安氏も安心して暮らせない日々が続いている中で、ファンの方から「拉致問題と君は関係ない。俺たちはサッカー選手である君を応援する」という言葉をかけられたと書かれていました。

国ではなくサッカー選手としての一個人を見る。これは私たちJCにも共通する認識です。

国、地域、言語が違えども、同じビジョンのもと集まった世界中のJCは仲間であり家族です。どんな状況であってもボーダレスに世界と繋がる心を私も持ち続けたいと考えます。

またこの本には、安氏が決して恵まれない環境のなかで夢を持ち続け、それを実現してきたことも書かれています。自分がどのような環境に置かれても変わることのない夢を持ち続けることの大切さは、私も含め恵まれた環境にいる我々にとって改めて考えさせられるものです。この本から学ぶことのできた以上二つのことを心に留め日々の活動に邁進していきたいと考えています。

- ⑤ ご自身が実践している人材育成やリーダーシップについてお書きください。（500文字）

私は人材育成もリーダーシップも共感から共有への道筋を大事にしています。まず私が人材育成を実践する上で意識している事は、月並みですが思いやりと理解です。これはただ単に思いやる、理解すると言う行為ではありません。日常的な思いやりや理解は、相手との日常的なコミュニケーションを通じて自分自身と相手が「共感」しやすい土壌作りをするために重要だと考えます。また人材を育成するということは、私が誰かを育成する一元的な行動で終わってはいけません。人材育成の重要テーマは、私が育成に関わった方が次の方を、そしてその方がまた次の方を

育てるといふことだと考えます。つまり次に繋いでいく情報であるためには、共感した情報がぼんやりと「共感」してもらっただけでは無く、しっかりと「共有」できたかの確認が重要だと考えます。次にリーダーシップですが、これも同様です。現代のリーダーシップは誰かを引っ張る力でも、誰かから押してもらっただけでもありません。共に歩む道筋を作りそしてそれを見失わず共有し続ける事がリーダーシップだと私は考えています。

「共感」で終わらせず、常に目的を「共有」し合い、それを個の成長に繋げていける環境作りがリーダーの役割だと私は考えます。

⑥ 青年会議所の魅力とは何でしょうか。（500文字）

1951年に青年会議所は誕生し「ひとつづくり」「まちづくり」「教育」「国際社会」など様々な分野において、その時々の課題に取り組み、明るい豊かな社会の創造に向け行動を起こしてきました。私たち青年会議所会員は、自身の成長と地域の発展のため、仲間とともに力を合わせ同じ目標に向かって歩みを進めなくてはなりません。自分の選んだ道信じ、仲間を信じ支え合いながら、率先して行動を起こすことが、地域を明るく豊かにする第一歩であり、青年会議所で活動することの素晴らしさであります。

40歳までという限られた時間の中で、人と人のつながり、地域と地域のつながりを学び、青年会議所という学び舎において、自己の成長と住み暮らす地域の発展のため、心許しあえる仲間たちとともにどんな困難をも乗り越えていくそれこそが私の思うJCの魅力です。

青年会議所には「奉仕・修練・友情」の三信条があります。人生の半分近い16年と言う時間を費やしても、その奥深い信条の一端に触れたかどうかは分かりませんが、しかし、常に追求し青年会議所へ積極的に参加する現在の私の日々こそが私の人生に大きな成果を自然と与えてくれている事だけは確信しております。

⑦ 青年会議所が組織改革を行うにあたり、現状の問題点と解決策をお書きください。（500文字）

青年会議所会員数は年々減少傾向にあり、在籍会員の平均年齢が上昇しています。特に地方のLOMでは顕著な傾向にあると実感しており、会員拡大は新入会員の育成や理事長候補者の育成などの課題以前の厳しい状況です。特にJCの間違ったイメージや若者へのJC運動がうまく浸透していない状況も多々あります。日本JC本会の進める組織運営と独立した事業を行う各LOMでは、組織の大きさや特色に合わせた個別の対応が必要です。LOMの特色は豊かな人財と地域に根差した事業、運動の発信です。しかしながら、その特色をアピールする事が苦手なLOMが多いと感じます。LOMのブランディングを全面に支援できるLOM魅力発信サポートが必要であると感じます。また、新入会員を受け入れるが、会員の少数なLOMはブロック協議会や九州地区協議会等へ出向をさせることが難しく、会員の成長の機会も失っております。各LOM会員数など状況に応じた対策が必要だと思えます。

- ⑧ 会員拡大（メンバー数）について、その必要性の有無と取り組むべき手法をお書きください。
（５００文字）

数は力でありJC運動の原動力です。会員拡大は明るく豊かな社会の実現には必要不可欠です。しかし現実には年々会員数の減少、平均年齢の上昇が各地LOMの共通の課題です。会員拡大において必要になるのは、拡大を推進するキーとなる人財です。全員で取り組むことはもちろん必要ですが、拡大を先導するキーマンの行動一つで会員拡大数は驚くほど変わります。各LOMのキーマンの育成がLOM全体の底上げにつながると確信しております。また、LOMのPR方法について具体的な手法やブランディングを学ぶ機会が必要です。地域にとって必要な運動や素晴らしい人財を持っていないながら認知されていない現状があるからです。地域に必要とされながらも、会員拡大が実現していないことに対して、客観的に分析し地域、時代に即した組織改革を進めなければ更なる会員減少へと突き進むものと考えます。また、各LOMで開催されるブロック大会など10名以下のLOMには大きな負担となっており、持ち回りで行われる大会の運営方法なども開催を含め検証する必要があると思います。

- ⑨ LOM拡大（LOM数）について、その必要性の有無と取り組むべき手法をお書きください。
（５００文字）

全国的にも会員数は減少し、組織としての力が落ちてきている。私たちはこの現状を受け入れ、置かれている立ち位置から目を背けてはならない。答えからいうとLOM数は拡大していくべきだ。なぜなら、LOM数が減れば私たちが住むまちの未来は暗くなり、次世代の若者たちが誇れるまちにならないからだ。しかし、前段に述べたように今の状況を考えると難しいのが現状だ。それならば、LOMを無理に存続することができない地域は、一度休止する決断をしても良いのではないだろうか。負担を感じ組織を維持することで不幸になるのは、私たち以上にまちの人びとだからだ。それならば原点に戻り、もう一度まちのために土壌を作り直す作業を様々な人を巻き込みながら行えば良いと思う。いまこそ根ざした草の根運動が求められている。地道な作業を続けることこそ、地域経済人である私たちに課せられた使命です。この苦難を乗り越えてこそLOMへの信頼は高まると同時に、確固たる地位になると思います。まちから望まれる組織へといまこそ変わるべきだ。そう信じている。

- ⑩ 国家青年会議所として本会・地区・ブロックとそれぞれのあるべき姿、そして各地会員会議所の発展にどう取り組むべきかお書きください。（５００字）

本会は、恒久的世界平和のために世界的な視野と国を動かすための運動が必要です。また、日本社会全域にかかわる問題に対する政策の立案が必要です。事業構築を行い各地会員会議所の連絡調整機関として行動することが求められています。地区は日本国内のエリアごとの課題を調査研究し、広域な視点で日本本会の運動を各ブロックへ落とし込むとともに、地域の情勢や課題を集約し日本本会へ報告する。ブロック協議会は日本本会の事業を地域の特性や環境に応じた形にカスタマイズし、地域や各地会員会議所に求められているニーズを把握、検証することで地域に

根差した事業構築を行う。各地会員会議所の発展のため日本JCの運動を地域へ伝播させることにより、より大きなスケールで事業構築できるような支援を行い、会員の視野を広げ、人財を育む。また、各地会員会議所の運動を下支えする。各地会員会議所が日本青年会議所の礎であることを認識し、地域それぞれの課題について各LOM理事長、メンバーの皆さんと多くのコミュニケーションを図る必要があると考えます。

⑪ 民間外交が必要な理由とその手法についてお書きください。（500文字）

民間外交の必要性は、第一に国家間に発生する問題が多様化し、これらに対応するためには政府の公的機構内部の人間や資源だけでは十分ではないことが顕在化してことが挙げられる。公的外交には二国間関係を発展させるということと、国益を守るという、元来両立しにくい根本的な外交ジレンマが生じやすい。目指すべきWinWinの関係性を築くに時間とマンパワーは非常に大きい事が容易に予想される。それに対し民間外交は自由度が高くアジェンダがスピーディーに作られやすい。公的外交よりもプロセスのコンテンツが少なく済む可能性も高いため、結果や実績からの改善点も見出す機会が増える。民間外交の成果が公的外交に良い影響を波及させる可能性もある。現在、交通・通信手段面での技術革新が進み、民間レベルでの国家間の活発な交流を可能にする条件が生まれてきている。手法のなかで重要なことは、まずは日本のトップリーダー達が民間外交に積極的になる事と考える。民間外交は多くの可能性は見出せるものの、それを裏付けるまでの実績の少なさや、実際のリスクの不透明性はまだ拭えない。当然バックボーンも何も無い状態で切り開けるほど安易なものではない。だからこそ、スポーツ・芸術・経済・学問・各種団体などの分野におけるトップリーダーの率先したチャレンジの繰り返しと実績作りこそが重要と考えます。

⑫ ブロック会長として担当する協議会をどのように指導し盛り上げていくか。

役員・委員長・スタッフの役割等、具体的にお書きください。（1000文字）

まずは、石田会頭の所信を基に、本会の運動方針を明確に理解させ、出向者全員が一丸となって同じ方向性を向いて行動するよう指導してまいります。またブロック内の9LOMの連絡調整機関としての役割を果たすために、各LOMの地域、組織が抱える問題点を明確にとらえさせ、その問題解決のために必要なことを探り、それを運動に具現化するよう指導してまいります。そして、出向者全員に各LOMを超えた「宮崎県」としての視点と問題意識をもつ重要性を説き、県全体として取り組むべき課題を見出させた上で、その課題把握の正確性と及び解決策の妥当性をしっかりと議論させ、宮崎県全体の発展の礎となるための運動を展開させます。更に、役員、委員長に対しては各LOMのメンバーの期待を受け、その代表として出向していることを理解させ、役員であることに誇りを持たせるとともに、出向を経験して成長した姿を見せることでメンバーの憧れとなる人財に育つよう指導してまいります。また、ブロック協議会は公益社団法人である日本青年会議所内の組織であり、厳格な運営が要求されます。計画立案から事業実施、検証、報告至るまで、ルールを遵守し緊張感を持ちながら手続を進めるよう指導してまいります。最後に、ブロック会長として、強いリーダーシップのもと何事にも率先行動し、ブロック協議会の役

員・委員長・スタッフの模範となるよう努めてまいります。そして、宮崎ブロック協議会を通して、県内9 LOMの全メンバーと志し同じく行動して行けるようLOMに一番近い協議会として対話を重視して行きたいと思っております。いつか本年度の役員より宮崎ブロック協議会長を担うそんな人材の育成につながるよう指導行動してまいります。

⑬ ブロック会長の役割を全うした時、そこにはどのような自分自身の姿を望みますか。

また、ブロック会長として出向したことにより、LOMに対してどのような貢献が出来ますか。(1000字)

ブロック協議会会長職を全うした暁には、リーダーシップ力の向上、また一期一会の精神を大切に自分自身を望みます。各地青年会議所に一番近い協議会として、県内9 LOMとの連絡調整機関という立ち位置に留まらず、各LOMの抱える課題解決の糸口を協議会として親愛なる仲間とともに手を取り合い、本気で行動することで、目的達成のためにメンバーを率いる力を醸成します。そして、これまで以上に地域の人とふれ合い、諸団体との連携やコミュニケーションを媒介してあらゆる相互承認を得ていく機会が多々あることから、それら一つひとつ出会いを学びの場とし、限られた時間の中で、多くの人と出会い切磋琢磨した成果として、自己成長へとつながり、一期一会の精神が高まることを望みます。そしてブロック会長として出向したことにより、LOMへの貢献として、己の信じた道を突き進む、夢見る次代の育成に貢献できることが期待できます。私が住み暮らす宮崎県日向市は、日向灘に面した黒潮文化と森林文化と人が融合する自然豊かなまちであり、地産地消、地産外商を中心としたフードビジネスと観光や移住促進に向けたサーフタウン構想、更に外国貿易の拠点港として栄える細島港といった地域経済の活性化に積極的なまちです。しかし長期的な視点で地域経済を考えたとき、地方が抱える人口流出、少子化対策は避けて通れない問題であり、今後、日向市が生産性の向上と需要拡大による経済発展ためには、夢を見ることが出来る人づくり、まちづくり、即ち教育再生が不可欠であり、私がブロック協議会の事業、運動を通して学び得た知識と経験をLOMで生かすことで、地域にかける熱い想いをメンバー一人ひとりに伝播させ、地域を牽引する真のリーダーが夢をもってあらゆることに挑戦し率先して行動するLOMへと変革します。

⑭ 日本JCのブランディングについて、どのように行っていけば良いかお書きください。(1000文字)

なぜ日本JCをブランディング化する必要があるのか。JCは明るい豊かな社会を築き上げるための社会変革団体であり、今後JCがますます認知度を上げていく事が出来れば、JCブランドに対する共感や信頼などを通じて、市民にとっての価値を高めていくことができると率直に考えます。また変革を興すためのメンバーや市民はひとりでも多い方が良いことは明白であり、ブランディングの成功が会員拡大、集客、PRといったあらゆる局面において、活動を有利に進めることに寄与するからです。

まず日本JCのブランディング化に向け取り組むことは、通年事業を増やしていく必要があると考えます。単年度制におけるデメリットとして、変革のきっかけとなった事業が継続して行われないことにより、「〇〇といえばJC」といった意識の浸透まで完結できていない事業が見られ

ます。継続はチカラ成り、という言葉通り、続けることで市民や対象世代に広く深く浸透し、ブランディング化できると思います。

また、日本一のSDGs推進団体として約3万人のメンバーが取り組むことは、ブランディング化に向け大きく前進したと実感します。日本において地域・社会貢献活動や環境保全に対するイメージの好感度は非常に高く、それをJCがプラットフォームとなり全国各地で展開していくことは、行政や諸団体への実績を根拠としたオンリーワンブランドにつながります。そのためには今後もSDGsの価値を正しく伝え、様々な施策を展開することがひいては日本JCのブランディング化に繋がると確信します。

そして、JCにおける最大の魅力は人づくりです。JCしかない時代から、JCもある時代と言われることも多いまだからこそ、JCとはどういった団体であるのかを事業や運動を通して理解していただくことが必要です。更に、JCの人づくりという価値を、沢山の市民の中の、どのターゲットに対して発信するのか明確にした上で伝えていくことが、その対象者への共感と信頼へつながり、JCの魅力が認知されていく事が日本JCのブランディング化と成っていきます。もちろん現役メンバーの立ち居振る舞いや言葉遣いなど、青年としての品格を更に向上させることが前提です。

- ⑮ ご自身が考える、日本の将来像とそれに対して日本青年会議所が果たすべき役割と運動についてお書きください。（1000文字）

私の考える日本の将来像は、少子高齢化に伴う人口減少による衰退です。国土交通省がまとめた資料では、日本の人口は2004年の12,784万人をピークに年々減少が進み2030年には11,522万人、2050年には9,515万人と予想されています。また高齢人口は約40%、若年人口は約9%になると予想されており、現在の少子化問題が多少の改善を見せても日本の人口減少は避けられず、確実に直面する問題となっています。この急激な変化は世界にも類をみない状況と言われており、故にすでに現在の問題であると考えます。

人口減少による問題点は、税収が減る、国際社会に遅れをとることが考えられます。また少子高齢化により生産年齢と呼ばれる15歳以上65歳未満の人口が減ることにより、現在でも人手不足が顕著化している飲食業や小売・運輸などの労働供給力は近々限界をむかえるといわれています。そこで、日本青年会議所の役割として如何に国内の出生率を高めていくかを考え、それを実践していくことであると考えます。そのためにはまず、国内の出生率が低い原因は何かということに向き合う必要があります。国立社会保障・人口問題研究所の調査結果で最も多かった答えが経済面の不安でした。特に若い年齢での結婚は経済的余裕がないことや、近くに子育て支援者がいないなど、子育て環境に対する不安から子供を持ちたいが持てない方が多いと感じるところです。また、現在国は少子化対策のために男性の育児休業取得率を2020年までに13.0%達成を目標としていますが、2018年の調査では6.16%と目標には遠く及ばない数字になっています。この数字から女性への育児の負担率が多いことも出生率低下の要因になっていることが読み取れます。これらをふまえ、日本青年会議所として、若者の子育て世帯への経済面の支援拡充のための施策の構築、子育て支援者が近くにいない家庭への支援体制の構築、そして男性の育児休業取得率向上のための取り組みを考え、確実に訪れると言われる少子高齢化社会を見据え、

日本の安定を維持し、また、大人や子供に限らず生きる目的に対する考え方についての教育面を見直す必要があると考えます。